

# 日本の伝統音楽の授業づくり

指導主事 猪狩 敦子

## I 研究の趣旨

### 1 教科としての課題

音楽科及び芸術科音楽（以下、音楽科という）の研修から見える授業の充実のための課題として、特に次の点が挙げられる。

- (1) 日本の伝統音楽の音楽的な特徴の考察
- (2) (1)を手がかりとした教材研究と指導の工夫

音楽科の授業は、歌唱・器楽・創作・鑑賞の活動を通して行われる。これらの活動そのものも児童生徒にとっては楽しいものだが、教科教育として行われる音楽科の授業では、活動の目的及び学習のねらいを明確にすることが求められる。

また、学習のねらいを定めるためには、教師が教材となる楽曲にどのような音楽的な価値があるのかを見抜くことが必要である。我が国及び世界の、古典から現代までの様々な音楽を授業で扱うためには、音楽に対する広い視野を養うことも求められる。特に、現行の学習指導要領から重視されている日本の伝統音楽では、指導上の課題が多く見られ、これまでの研修からは、「知識や技術の伝達に終始しやすい」「学習のねらいが不明確である」などの課題が挙げられる。

次のグラフは、高等学校入学までに日本の伝統音楽に関して学習したことについて、今年度ある県立高等学校における音楽Iの授業で実施したアンケート調査の結果をまとめたものである。

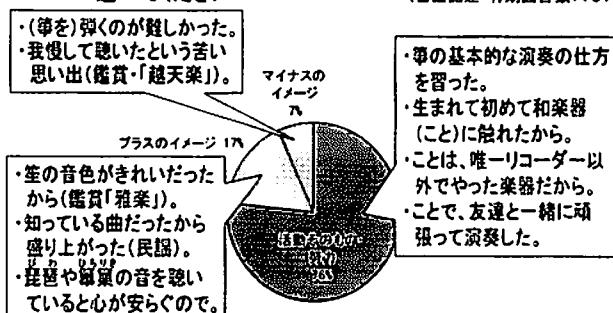
自由記述ではあるが、回答の内容は「活動そのもの」「プラスのイメージ」「マイナスのイメージ」と言えるような、大きく三つの傾向に分かれた。あくまでも学習に対する生徒の印象を聞くアンケートではあるが、生徒の興味や関心に沿った内容にとどまるのではなく、そこから新たな価値に気付いたり、発見したりすることのできる授業を充実させていく必要があると言えるのではないだろうか。

### 高等学校入学までに音楽の授業で学習したこと

についてのアンケート 回答者：県立高等学校1年生 音楽選択者125名

Q:日本の伝統音楽の学習で、思い出に残っていることについて二つ述べてください

(自由記述・有効回答数:167)



### 2 「感受」を重視した授業

音楽科の授業で今求められているものの一つに音楽的な「感受」を重視することが挙げられる。「感受」とは、音楽科の評価の観点の一つである。現行の学習指導要領解説では、これを「音楽の構成要素と表現要素を知覚し、それらの働きによって生まれる曲想や美しさを、イメージを持って感じ取る能力である」と示され、音楽科における「基礎的な能力」としている。つまり、誰でも客観的に捉えられる音楽的な特徴を手がかりに音楽を感じ取ったり味わったりすることと言える。

### 3 「音楽の諸要素」の考え方

「感受」を重視した授業を行うためには、教材となる楽曲から「感受」のポイントとなる音楽的な要素を引き出すことが大切であり、楽曲分析など教材研究の充実が求められる。現行の学習指導要領解説で示されている「音楽の諸要素」は次の通りである。

- 【構成要素】音色、リズム、旋律、和声(音と音とのかかわり合いを含む)、形式など
- 【表現要素】速度、強弱など

西洋の音楽に比べて、なぜ日本の伝統音楽は知識や技術の習得に陥りやすいのかと考えるうちに、この諸要素から日本の伝統音楽の面白さを引き出しきれないところに課題があるのではないかという仮説に至った。西洋音楽を軸に音楽を学ぶことの多かつ

「グラフ化による自己分析」「目標を持つのに役立つ」の二つが最も多い。感想からは、四能力に基づく各質問項目が、現在の自分を客観的に理解する視点として、また、現在の自分の不十分な点を見だし、今後の自己成長のための目標設定の視点として有効に機能していることが読み取れる。

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 研究の成果

##### (1) キャリア教育を意識した体験活動を行う上で踏まえるべき四つの視点の提示

理論研究としてキャリア教育の目標を分析する中で、キャリア教育を実践していく上で踏まえるべき視点を四つに整理し、提示することができた。

##### (2) 自己理解を深めるための「自己評価シート」の開発及び実践を通しての改善

昨年度までの研究で開発した「自己評価シート」を活用するに当たって、研究協力校の教員と協議を重ねる中で、各活動段階ごとに形式的に評価し、グラフ化する形式に改良することができた。当初の条件を満たす、より実践的な形式に改善することができたと考える。

##### (3) 自己理解を深める「ジョブパスポート」、並びに「自己評価シート」の有効性

研究協力校において職場体験活動に焦点を当て、三つの手立てについて実践することを通して、当初目標とした「自己理解を深める」ことについての有効性を検証することができた。同時に、四能力の視点から質問項目を導き出し作成した自己評価シートが、生徒に今後の目標を持たせる上で有効な手立てとなることも確認することができた。このことは、課題とされている「働く上で必要とされる諸能力の発達」を促すことにもつながると考える。

##### (4) キャリア教育を意識した自己評価項目作成のための視点の提示

「自己評価シート」については、各活動段階に合わせて作成を行ってきた。四能力の視点に基づく24の質問項目を活動段階ごとに導き出すことを通して、各質問項目を作成するための視点を見いだすことができた。学校独自の各体験活動に合わせて、「自

己評価シート」を作成するための指標になると考える。

#### 2 今後の課題

##### (1) 「経験ファイル」の職場体験以外の体験活動への継続的活用

今回は、職場体験活動に焦点を当て、各手立ての実践と検証が中心となった。当初の目標である自己理解や諸能力の発達のためには、他の体験活動での活用、並びに高等学校を含めた継続的活用についての実践並びに検証が必要であると考えられる。

##### (2) 「経験ファイル」作成のための教師用・生徒用マニュアルづくり

条件②（方法面）の「汎用性があり、どの学校でも活用できる。」を考慮すると、「経験ファイル作成の手引」等、各学校の教師並びに生徒に対しての説明用マニュアル作りが必要である。

##### (3) 「経験ファイル」の進路指導への積極的活用

今回の研究の中核となった「経験ファイル」が最も有効に機能するのは、進路選択時の自分の適性等を考える場においてである。「進路指導が出口指導に偏っている」との批判が多いことから、この「経験ファイル」を、定期的に行われる三者相談や進路相談の際に意識して取り上げるなど、日頃の学校生活と結び付けて積極的に活用を図る必要があると考える。

#### <引用・参考文献>

- 1) 初等中等教育と高等教育との接続の改善について  
(中央教育審議会 1999年)
- 2) キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書  
(国立教育政策研究所 2004年)
- 3) キャリア教育入門 三村 隆男 著  
(実業之日本社 2004年)
- 4) キャリア教育—自立していく子どもたち—  
渡辺美枝子 著 (東京書籍 2008年)
- 5) 小中学校のキャリア教育実践プログラム  
鹿嶋研之助 亀井浩明 編著 (ぎょうせい 2007年)
- 6) ポートフォリオで進路革命! 鈴木敏恵 著
- 7) 経験の意味世界をひらく 一教育にとって経験とは何か—  
市村尚久 早川 操 松浦良充 広石英記 編  
(東信堂 2003年)
- 8) 入門進路指導・相談  
仙崎武 野々村新 渡辺美枝子 菊池武烈 編  
(福村出版 2000年)

た私たち教師は、どうしても西洋音楽的な捉えになりがちなのではないかと感じたからである。そこで、日本の伝統音楽における「感受」を重視した授業づくりのために、次の2点について研究することにした。

- |                           |
|---------------------------|
| (1) 日本の伝統音楽の音楽的な特徴の考察     |
| (2) (1)を手がかりとした教材研究と指導の工夫 |

## II 研究の概要

### 1 日本の伝統音楽の音楽的な特徴の考察

先行研究をもとに、日本の伝統音楽が理解しやすくなると思われる特徴として、比較対象を西洋の音楽とし、五つを例に挙げ、まとめたものが図1である。なお、ここでいう西洋の音楽とは、18～20世紀の初頭に主としてヨーロッパで盛んであった、いわゆる調性音楽のこととする。

日本の伝統音楽	特徴例	西洋の「調性音楽」
① 雑音的。自然音に近い。	① 音色	豊かな倍音を含み透明度が高い。
・5音からなる音階 ・解釈に諸説がある。 ・音列に沿った動きの旋律が多い。	② 音階と旋律	・7音からなる長・短音階 ・全24調
・無拍(メリスマ) ・有拍(等音価、高低の感覚)	③ 拍とリズム	・強い拍節感 (強弱の規則的な交代)
音色的効果、「不即不離」	④ 音の重なり	和音は音楽の三要素
ほとんどの種目が「語り物」や「歌い物」など、声楽に関する。純粋な器楽曲も「唱歌」で学ぶ。	⑤ ことば性 (音・音楽と日本語とのかわり)	楽譜に書かれた、言わば設計された音楽。リズム・旋律・和音が設計の基本。

図1 日本の伝統音楽の音楽的な特徴例

### 2 日本の伝統音楽の音楽的な特徴を手がかりとした教材研究の工夫

#### (1) 実技演習

対象	内容
小学校経験者研修Ⅰ	民謡(声の出し方や音色、コブシ、フリなどの歌い方)
中学校・高等学校経験者研修Ⅰ	箏・三味線(調弦、奏法による音色、種目のかかわり、時代による音楽様式の変遷、間、拍など)
高等学校経験者研修Ⅱ	篠笛・尺八(奏法による音色の変化や効果、フレーズの捉え方、三味線とのかかわりなど)

外部講師による演習を取り入れ、小・中・高の経験者研修Ⅰと高等学校の経験者研修Ⅱで実施した。

研修に当たり、図1の五つの特徴を用いて教材となる楽曲を分析的に考え、そこで抽出した音楽的な特徴を「感受」するための活動の工夫を行った。

この中から、小学校経験者研修Ⅰにおける民謡を用いた演習について紹介する。

#### ① 演習の概要

##### ア 対象

小学校経験者研修Ⅰ研修者と聴講者の15名

##### イ 教材曲

小学校の教科書で取り上げられている民謡から郷土の福島県民謡「会津磐梯山」と、小・中・高等学校の教科書に共通して取り上げられている北海道民謡「ソーラン節」を使用した。

##### ウ ねらい

民謡は、人々の生活の中から生まれ歌い継がれてきた歌であり、西洋の音楽のように楽譜に設計された音楽とは異なる性格を持つ。また、音の揺れやおはやしなどにより、その場の気分や雰囲気や即興的に音楽をつくるという特徴もみられる。これらの民謡の面白さは、楽譜に書かれたものを正確に再現するという西洋音楽的な考え方では感じ取りにくいものである。そこで、図1の例を用いて教材曲から次の要素を引き出し、活動を通して味わうことをねらいとする演習を行った。

- |                         |
|-------------------------|
| ①音色 ②音階と旋律 ④音の重なり ⑤ことば性 |
|-------------------------|

#### ② 演習の実際

##### ア 楽譜の比較

小学校から高等学校までの教科書に載っている「ソーラン節」の楽譜を見比べることにより、楽譜によって記されている内容に様々な違いがあることがわかる。各楽譜の曲の冒頭だけでも、調性・テンポ・強弱・リズム等に違いがあることが読み取れた。

##### イ 口承による歌唱表現

楽譜を使用せず、講師の唄を口承で学ぶことにより、民謡に合った声、旋律の捉え方とコブシやフリなどの微妙な音の揺らし方、おはやしや三味線との掛け合いによる雰囲気の変化など、日本の民謡の面

白さを感じ取ることを試みた。

ウ 講師

財団法人日本民謡協会 県北連合会 福島桂支部長

桂 文子 氏

藤本流民謡三味線師範 藤本 婦美吉 氏

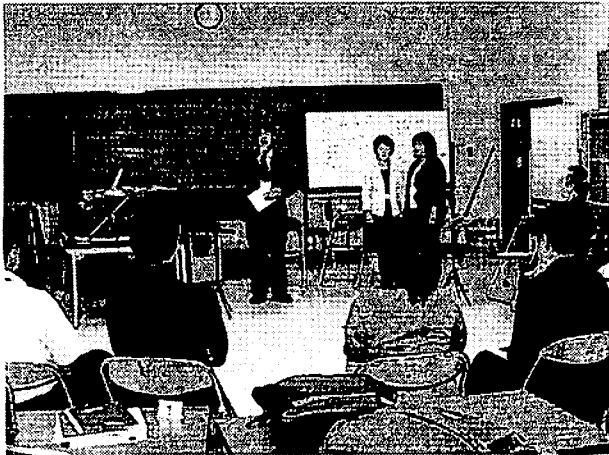


図2 演習の様子

(2) 学習指導案・授業の改善を通じた取組み

今年度の研修講座において、研修者が事前に作成した日本の伝統音楽を題材とした学習指導案について、教材研究や指導の在り方について検討し、授業の改善に取り組んだ例から、2例を紹介する。

① 高等学校音楽Ⅰでの取組み

ア 題材名 「和楽器に親しむ」

イ 教材観の見直し

「感受」を重視した授業のためには、楽譜の読み方や楽器の奏法などの技術的な能力を高めることを最終的な目標とするのではなく、それを通してどのような音楽的な内容を学ぶのかを明確にする必要がある。ここでは箏の奏法や拍、リズムなどを身に付けさせることを通して「箏の音色の美しさ」について学ぶことを題材の目標とし、「感受」させたい音色などについて明らかにした。

題材の目標のキーワード (検討前)

- ・ 箏の基本奏法・合奏・できることへの自信  
→技術
- ・ 箏の音色の美しさ  
→何を感じ取ればよいのか明確にする必要がある。
- ・ ソルフージュ能力(拍・リズム・音価・読譜)  
→正確な拍



題材の目標のキーワード (検討後)

- ・ 箏の基本奏法・合奏・できることへの自信  
→多彩な音色を表現するための技術
- ・ 箏の音色の美しさ  
→絃の伸縮、箏爪の使い方などによる音色の変化
- ・ ソルフージュ能力(拍・リズム・音価・読譜)  
→正確な拍だけではなく、節のまとまりや箏の音色の変化などから感じる拍

学習指導案の検討により、この題材からは特に次の要素が引き出せるのではないかと考えた。

- ①音色 ③拍とリズム ⑤ことば性

ウ 指導の工夫

教材曲の練習に「口唱歌」\*1を取り入れることにより、教師の口唱歌から音程や音色のニュアンスを感じ取り、その表現をするために試行錯誤することで箏の奏法と音色についての学習が深められるのではないかと考え、生徒の活動に取り入れた。

\*1 口唱歌：楽器の旋律・リズムに一定の音節をあてて口で唱えること。

参考文献：「邦楽百科辞典」音楽之友社

② 高等学校音楽Ⅰでの取組み

ア 題材名 「三線に親しむ」

イ 教材観の見直し

生徒が自ら「カンカラ三線」を製作し、それを用いて三線の奏法を学び、沖縄の民謡の弾き歌いをするという活動を通して、何を「感受」し何を学ぶのかを考えたとき、次のような学習内容に広がる可能性を見いだせた。

- ・ カンカラ三線の製作は楽器の構造を理解する手立てとし、文化の伝承や発展の学習と関連付けられるのではないか。
- ・ 歌や三線で沖縄の民謡の演奏ができるようになることを通して、我が国の音楽の特徴のうち音階やテクスチュア(和声を含む音と音とのかかわり合い)、音色などの「感受」と関連付けられるのではないか。

このような学習指導案の検討により、この題材からは特に次の音楽的な要素が引き出せるのではないかと考えた。

- ①音色 ②音階と旋律 ④音の重なり

## ウ 指導の工夫

②、④に関連したテクスチュア\*<sup>2</sup>についての学習では、生徒が本題材の前に学習した「Amazing Grace」と本題材での教材曲「ていんさぐぬはな」を比較し、ホモフォニック\*<sup>3</sup>なテクスチュアとヘテロフォニー\*<sup>4</sup>についての理解を深められるのではないかと考え、指導のねらいに取り入れた。

\*2 テクスチュア：ある楽曲における、音の基本的な組み合わせ方、織り合わせ方。

\*3 ホモフォニー：ある1声部が旋律を受け持ち、他の声部が和音を中心とした伴奏を行う音楽形態。

\*4 ヘテロフォニー：同一旋律を複数の奏者が演奏するとき、即興的な装飾や変形などのため、音程やリズムにずれを生じた状態。民族音楽では、伴奏楽器が歌と同旋律を装飾的に演奏することで、この状態を生じることが多い。

参考文献：「音楽中辞典」音楽之友社

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

日本の伝統音楽の特徴例を挙げることにより、日本の伝統音楽の面白さが見えやすくなった。また、この特徴例を考える上では西洋の音楽との比較が有効であり、比較のためには西洋の音楽についても改めて見直すことが必要であることが分かった。

音楽科において様々な音楽の学習をすることは、異文化理解につながるものである。ある音楽について学習したり、そこで学んだことを他の国や地域の音楽と比較したりすることは、それぞれの文化の持つ固有の価値を尊重し、多様性を理解することにつながるのではないだろうか。

### 2 今後の課題

「感受」を重視した授業のためには、教材となる楽曲を分析し、音楽的な価値を探ることが欠かせないことが分かった。また、そのことにより指導のねらいが明確になることが研修者の感想にも反映されており、成果として確認できた。

#### 研修者の感想より

- ・民謡に合う歌い方について学ぶ良い機会となった。(小学校)
- ・会津磐梯山もソーラン節も、この研修を受けなかったら楽譜から読み取れることしか体感させられなかったかも知れません。(小学校)
- ・実技を通して、技術的なことだけではなく、今

まで曖昧になっていた(中略)伝統音楽のあり方について知ることができました。(中学校)

・和楽器の取り扱いについて教師が何を学ばせたのか、その目的をきちんと持って授業を行うことの大切さを感じた。(中略)演習からは音色の素晴らしさを感じた。授業への教材化に向けて今後工夫していきたい。(高等学校)

しかし、実際の授業に当たっては、それらの「感受」のポイントを児童生徒にどのように感じ取らせたり発見させたりするのかなど、指導の在り方を改めて見直す必要があることも、実践を通して見えてきた。児童生徒が基礎的・基本的な知識・技能を習得、活用し、学習意欲を高めていくためには、音楽的な学習内容を単に知識として理解するだけではなく、音や音楽から感じ取ったり、学んだことを表現や鑑賞に生かしたりすることのできる指導の工夫が求められる。様々な曲種において、教材から「感受」のポイントを探るとともに、授業ではどのように展開していくのかを研究していく必要がある。

また、本研究の途中で告示された新学習指導要領では、伝統や文化に関する教育の充実が求められており、日本の伝統音楽に関する指導についても新たな内容が盛り込まれている。今後の授業づくりにおいては、これらの趣旨を理解し、何を児童生徒の学習に反映させていけばよいのかを検討していく必要がある。

#### 〈主な参考文献〉

- 1) 小学校学習指導要領解説 音楽編 (1999年)
- 2) 中学校学習指導要領解説 音楽編 (1999年)  
1)～2) 文部省
- 3) 高等学校学習指導要領解説 芸術編 音楽編 美術編 (1999年、2006年一部補訂)
- 4) 小学校学習指導要領解説 音楽編 (2008年)
- 5) 中学校学習指導要領 音楽編 (2008年)  
3)～5) 文部科学省
- 6) 日本の音－世界の中の日本音楽－  
小泉文夫著(平凡社 2006年)
- 7) 音楽教育における「不易」と「流行」  
西澤昭男 他著(教育芸術社 2002年)
- 8) よくわかる日本音楽基礎講座  
福井昭史著(音楽之友社 2008年)
- 9) 日本語はなぜ美しいのか  
黒川伊保子著(集英社新書 2007年)
- 10) 西洋音楽史  
岡田暁生著(中公新書 2006年)
- 11) 楽典  
石桁真礼生 他著(音楽之友社 1989年)